ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第105回放送の概要（2015年11月28日放送）

パーソナリティ

さくら
（安本久美子）
たろう
（佃　由晃）
なか
（中嶋邦弘）
かりん
（妹尾優香）
あな
（岸本幸恵）

ミキサー

門ちゃん
（門田成延）

相談役

わだかん
（和田幹司）

会計

小山俊則

(CM) 神戸を代表する本格中華料理の名店、神仙閣神戸店は、昭和９年の創業から今もなお、神戸の地で愛され続けており、繊細な味わいと中華の伝統スタイルを継承しながら、華やかな北京料理を提供させていただいています。兵庫高校ＯＢの武陽会及び４９陽会の皆さんも、神仙閣神戸店で、同窓会、披露宴は勿論、クラス会、祝勝会などの会合に是非ご利用ください。
　本日は神仙閣　神戸店様、電話０５０－５７８９－６０８０さまのご協力を頂きました。

(CM)神戸で乗って一番楽しいタクシーそれはペリーヌタクシーです。優しさと安全・安心を乗せて走ります。観光・ゼミ・研修・福祉輸送等乗れば心温まり、思わず笑みが浮かぶ、心を結び、出会いを作るタクシーです。本日は誇りと信頼の良質なサービスを提供する、ペリーヌタクシー様　（電話０７８－５２１－００４６）の御協力を頂きました。

１．ゲストコーナ（１）ゆうかり放送委員会：和田幹司、中嶋邦宏、佃　由晃（全員 49 陽会）

　これからの時間はゲストコーナ-ですが、本日は、ゆうかり放送委員会のメンバーが、東日本大震災の翌年から年１回行っている東北訪問の４回目を、９月及び 10 月に行ったので、その結果を報告します。

　東日本大震災から４年８カ月経過し、岩手、宮城県は復興が目に見える形で進んでいますが、福島県は原発事故のため、いまだに震災直後の手つかずの状態のまま残されているところがあります。今年は、和田幹司が９月に宮城、福島を訪問し、中嶋邦弘と佃　由晃が宮城、福島を訪問しました。
　はじめに和田幹司より報告します。

（１）和田幹司の報告（９月８日～10 日）

（宮城県気仙沼市）

わだかんさんは、お酒を飲んで美味しいものを食べようというコンセプトで訪問しました。神戸長田から東北を訪問すると、震災同窓生という感覚で受け入れてもらえること、宮城、福島ともにボランティア団体を通じて紹介してもらい訪問した。気仙沼は４回目の訪問で、感激したのは、駅からタクシーに乗り、神戸から来たと言うと、何でと聞かれ、復興状況を見るのと友達と酒を飲むためと言うと、旅館に行くまで遠廻りで波止場を廻り、嵩上げ工事などを説明してくれた。運転手が非常に親切で、漁業の町で関連施設は出来あがっているが、住宅や店舗は戻っておらず、仮設での生活が続いている状況であった。

すし屋では集まってくれた住民の方と、近くの酒造会社の美味しい男山をいただいた。席ではストレートに悲しい話はしないが、親戚も含め７人を亡くしたバッティングセンター経営者は、言葉の端々に、残った一人息子のために、左右のバッターボックスが使えるように作り、ボックスの番号は奥さんの誕生日にしたなどを語ってくれた。

翌日は、気仙沼市唐桑を訪問した。半島の牡蠣が美味しい所で、立命館の学生が夏にボランティアで訪問し、ツリーハウスという小屋を作り、また近くの民家を改造し、おしゃべりとパソコンを使える、若者と現地の住民の方との交流できる場所が出来ていた。牡蠣も美味しいし、人の心も暖かい場所になっていた。

ツリーハウス

気仙沼の友人と会食

（福島県二本松市）

福島県で「いがす賞」（“いかす”の方言）をもらった二本松のグループに神戸訪問が当たり、そこの区長（自治会長）が長田に行きたいと言って一人抜けてきてくれた。わだかんさんが半日案内した縁で二本松を訪問した。智恵子抄で有名な智恵子の温泉で食事することになり、仮設に住んでいる浪江町からの避難者が８人待ってくれていた。酒をのみ、カラオケで大いに盛り上がった。翌日仮設を訪問し、浪江町は放射能の不安があり、帰還時期も決まらず、当分仮設暮らしが続く事、応対してくれた一人は県内の山形に近い地域に家を購入したが、仮設には高齢者が残っているので、帰還の見通しが立つまでは一緒に仮設暮らしを続けたいと言っていた。

浪江町からの避難者の仮設

仮設内

仮設内のおかんアート作品

浪江町の皆さんとの会食

（2）中嶋邦弘、佃　由晃の報告（10 月 19 日～21 日）

（宮城県山元町）

宮城大学地域連携センター、山元復興ステーションの特任調査研究員　橋本大樹さんにお話を伺いました。宮城大学は山元町から**まちづくり**委託を受け、橋本さんが現地でまちづくりの支援をしている。

山元町は目に見える形で復興がかなり進んでいる。新しいＪＲ常磐線沿いに３つの新市街地が出来る予定で、常磐線はルートを陸側に移し、来年中には完成する予定になっている。

（注）相馬―浜吉田間が開通する。但し相馬から原ノ町間は以前に開通しているが、原ノ町から南の竜田までは帰宅困難区域を通るため開通の見通しはたっていない。

7.2mの防潮堤を建設中で、災害公営住宅や隣接する分譲住宅も出来あがってきており、復興のスピードが速いように感じた。早い理由は町長、行政が住民の意向を聞かずに行っているためである。公営住宅や分譲地に住むようになると、一番大事な事はハード**街づくり**からソフトの**まちづくり**に移行する必要があることで、**まちづくり**について住民も行政も経験がないため、町から委託を受けた宮城大学山元復興ステーションの橋本さん他の活動が非常に重要になってくる。

山元町から女川町に視察に行き、女川町は 42～43 歳の町長が若い世代にまちづくりを任せており、

20mの大津波で大災害を蒙ったが、漁業の町であるため、津波は防潮堤で対応するのではなく逃げることを基本に街づくりを考えていることを知った。

山元町の嵩上げ工事

常磐線の復旧工事

災害公営住宅

集会所

（宮城県名取市、閖上町）

神戸市から応援派遣されている上畑宏喜さん、パシフィックコンサルタンツの安本賢司さんにお話を伺いました。

宮城県名取市閖上地区は漁業の古い町で、復興計画は今どんどん進められている。**閖上地区**では、海沿いに家を建てられない地区に指定された。それより内陸で、区画整理事業や集団移転事業がスタート。堤防で全てを防ぐのではなく、津波の威力を減衰させる２次防御ラインで５m嵩上げする。２次防御ラインより内側の名取川沿岸は土地区画整理事業で５m嵩上げして、戸建てや集合住宅で集団移転を図る。もっと内陸部の一般住宅団地などにも、災害公営住宅を建て、集団移転を図る。戸建て住宅の場合、東北地方では神戸と違って広い敷地を望まれる。安全な高速道路より内陸の災害公営住宅（戸建て、集合住宅）に人気がある。

震災前のピーク時、閖上地区には６０００人いた。そのうち３分の１の２０００人がこの地に残りたい意向。計画づくりで、話し合いが長くかかったが、そもそも閖上地区が６０００人規模で合意形成なんて実際無理なこと。お金のある人や諦めた人たちは既に地域を出て行き、残っているのは賛同している人。アンケートで戻るとした希望者も、今後の事情の変化で減少するかもしれない。

街づくり完成は２９年度と言っているが、もっとかかりそう。残存建物の撤去や地下配管（上下水など）の活用継続と廃止時期の難しさ、嵩上げ工事もあってそんなに早く進められない。**新堤防（7.2m）**は国が建設してほぼ終わり、県の漁港部分が手つかずで、海に向かって空いており、問題が残る。閖上中学校は取り壊しの準備中。「ＮＰＯ閖上の記憶」が、浜手に市が整備する「震災記念公園」に中学校の慰霊碑を移転する。

間もなく解体される閖上中学校

名取市慰霊碑

閖上中学校犠牲者の慰霊碑

閖上地域はこれから復興が始まる

2．ミュージック：復興支援ソング「花は咲く」：岩井俊二作詞、菅野よう子作曲

3．ゲストコーナ（2）

（福島県楢葉町）

一般社団法人ならはみらいの職員、西崎芽衣さん、山本尚樹さん、新田勇太さん、及び町民の坂本房男さんにお話を伺いました。

楢葉町を訪問した理由は、2011 年３月 11 日の福島原発事故で全町民避難（県内避難：6396 人、県外：985 人　平成 27 年７月 31 日時点）を強いられたこと、今年９月５日、４年半ぶりに、全町民避難の自治体では初めて、避難指示が解除された町であること、そしてならはみらいの職員の西崎芽衣さんは、立命館大学の学生で、３回生が終わってから１年間休学し、楢葉町支援のために一般社団法人「な

らはみらい」の職員として働いており、2、3 回生の時に真野地区でゼミ活動していた時に知り合い、楢葉町の状況を聞くために訪問した。

楢葉町の住民登録人口は、2011 年３月は 8042 人（平成２３年３月１１日時点）、2015 年８月末は 7368 人となっている。

町民の坂本さんにお話を聞くと、３月 11 日原発事故発生し、翌日避難指示があり一時親戚を頼って県外に移っていたが、その年の 10 月からいわき市で仮設生活を始めた。今年９月５日に避難解除があり楢葉町に戻られた。震災直後の避難所で一番きつかったのは、雪が降り出した厳しい寒さの中、中学校の避難所のコンクリートに新聞紙をひいて、自衛隊支給の黄色の毛布で過ごした 10 日間だったそうです。奥さんは働いていた工場が県外に変わると共に県外に変わったので、坂本さんは一人暮らしを続け、心労から心臓を悪くし、肺炎患い入退院を繰り返したが、今はやっと健康を取り戻している。

訪問した日は、福島第一原発を廃炉にするために必要な装置を開発する、楢葉遠隔技術センターの開所式があり、総理大臣も出席し、式の後地元住民との懇談会があった。出席した坂本さんは、避難解除になってよかったという話をしてほしいと言われたが、大半の人は帰ろうかどうか迷っていること、理由は、除染が山林を除き、道路と住宅地から 20mの範囲しか行なわれていないので、放射線、放射能に対する不安が残っているので、なかなか帰る決断が出来ない事を訴えた。二本松市に避難している浪江町の人も、除染が不十分な状態にあるのに帰還解除はおかしいと訴えていた。

楢葉町では、2017 年４月には小・中学校が町内で再開予定としている。再開時の在籍希望について調査したところ、小・中学生あわせて 36 人で震災前の 5%、仮設校舎に通う子どもの２割強であった。町として再生できるかは、若年世代がどれだけ戻ってくるのかが鍵となる。

このような状況中で**「一般社団法人ならはみらい」**は、戻りやすい環境を作ることと、既に戻った方（今は 2700 世帯のうち 235 世帯 388 名（平成 27 年 12 月４日現在）の生き甲斐を作る様々な取り組みをしている。例えば避難している人で、出来る限り故郷に近い場所に住みたい人に、町内の空き家・空き地を斡旋する**空き家・空き地バンク事業**の取り組みをしている。

戻らない、戻れないと考えている人は、放射能に対する不安、原発の安全性、インフラの整備遅れ、育児・教育環境、高齢者に対する福祉環境など多くの不安を抱いている。このような多くの課題があるため**「ならはみらい」**は、住みやすいまちづくりのために、住民が自ら活動するための支援を行っている。

いわき市にある楢葉町住民の仮設

除染で発生した廃棄物の仮保管

楢葉町仮設店舗

楢葉遠隔技術開発センター

天神岬スポーツ公園内宿泊施設の線量率

会食参加者

（福島県庁　農林水産部）

食産業振興監の橋本典男さんと流通販売担当主幹の和田山安信さんにお話を伺いました。

食の安全安心は、検査体制をしっかり構築して、基準も世界各国の１０分の１に設定している。それで大丈夫なものを市場に出している。

①**米**は流通分も自食分も全袋全検査、野菜はサンプル検査、水産品も現在試験操業中で、しっかりと検

査している。福島産全体では元のレベルに徐々に戻りつつあるが、販売量と価格の問題があり、量は作付面積が被災地・帰還困難地などで減少し、価格は一部を除き、元に戻っていない。

②**食肉は**一部、汚染藁問題で影響はあったが、全頭検査体制でやっているので福島県産は全てＯＫだが、他県産と比べると価格がやや戻りきれていない。

③**野菜・果物の青果物**は、ほぼ震災前にもどっているが、現在高値が続く他県産のところまでは戻っていない。

④**漁業は試験操業中**で、全量検査、数値によっては精密検査を追加実施して、合格したものしか出していない。魚に関しては、今は問題になるものはない。

⑤**林産品**のきのこ・なめこ類は、人工栽培は大丈夫だが、自然物で少し汚染が残っているものがある。

⑥**特産**のあんぽ柿はすこしずつ回復へと向かっている。お米と牛肉とあんぽ柿は、モニタリング検査ではなく全量検査を実施している。

⑦**材木類**は、低下傾向にある。地域によっては切り出し作業ができないところもあるが、復興需要もあって戻って来ている。

風評被害問題については、理解いただけるように、いろんな機会をとらえ、正確な情報、復興の現状を発信している。一部の外国で福島県産または日本産に対して輸入制限を続けているところもあり残念です。

（福島県庁　復興本部）

企画調整部政策監（兼）企画推進室長の松崎浩司さんにお話を伺いました。

復興は、岩手や宮城と比べてもまだまだ。特に、帰還困難地域では全く何も対応できていない。**避難者は、現在 10 万 8000 人**、そのうち**県内に６万 3000 人、県外に４万 5000 人**で、東京、埼玉、新潟、茨城方面が多い。ピーク時は 16 万人だったが、帰還したか、住民票を移したかで、避難者にカウントされなくなったため。避難指示地区は、帰還困難区域（入れない）、居住制限区域（昼は入れる）、避難指示解除準備区域（帰還を待っている）であるが、基本的には、生活インフラが戻っていないので帰る人は少ない。楢葉町はこの９月に全町避難の地では初めて解除された。国は２０１７年３月までに避難指示地区の全部を解除したいとしており、あと２年間でその環境を整える方針が出ている。除染もやり、自然減もあって、その頃には汚染はほとんど問題ない、と考えている。

まちづくりでは、海岸に堤防、内陸にも防御ラインを造り、多重防御を図っている。しかし、避難地域の復興はまだ手つかずで、どんな復興計画にするかも決まっていない。そのほかの地域では、あと２～３年で復興まちづくりを終えたいところ。

・**住宅**では、仮設・借上げで１万６０００戸を用意。自主避難の２万５０００人の方にはあと２年で戻ってきてほしいところ。復興公営住宅を原発避難者向け５０００戸、地震津波避難者向け３０００戸を予定するが、いま併せて２０００戸余である。避難者の見守り活動も実施し生活環境（店舗、バス、銀行、郵便、学校など）も整えていっている。都市部の便利なところに避難した人は、慣れてくると戻り難いことになる。

・**除染面**では、現在では部分的に高い箇所は残ってはいるが、線量も世界と比べてそんなに高いとは言えない。中間貯蔵施設は３年ぐらいで造る予定だったが、これはほとんど進んでいない。

・**原発対策**も、汚染水の処理が難しい。サブドレインの稼働で半分ぐらいのレベルになろう。汚染水タン

ク 1000 基は手つかずのまま。廃炉に向けて、大熊町に作業宿舎を建設している。いろいろな研究機関もできてくるので、東電関係者をはじめかなり多くの人が入ってくるだろう。

・**復興特需**はいま有りすぎて人が足らず、値段も上がって大変だ。当分この需要状況は続くとみている。東京オリンピック時には、福島の復興をアッピールしたいものです。また、福島でも、震災のアーカイブセンターのような施設を整備して行きたいと考えている。

（3）被災地の現状と課題

宮城県はハードの復興は目に見えて進んでいる。しかしソフト面のまちづくりに関しては、不十分な面があるので専門家の支援が今後も継続して必要のようだ。

福島県については、現在も避難している 10 万人の方がどの程度戻れるか、これからが正念場になる。震災後４年８カ月経過しても 3.11 の当時のままの所が多く残っており、戻るに際して放射能に対する不安感の払しょく、戻る方は高齢者が多い（若者が少ない）、人口が減少するなどから、元のコミュニティの復活に関する課題など余りにも課題が多すぎる。

今回楢葉町の状況を伺ったが、立命館だけでなく多くの学校から学生が支援に来ることにより、地元の人々が元気を取り戻すきっかけになっていることを感じた。このような全国からの支援が益々大事になってくると思われる。

楢葉町は全町が避難した中で最初に避難解除された町のため、楢葉町の復興がモデルケースになるので注目されている。将来戻っても良いと考えている人は半分以下で、来年 3 月で避難生活が 5 年経過し、いまだに避難指示区域の方は、実際に戻れる時期はかなり先になることも考えられ、時間経過と共に戻れなくなる状況に追い込まれることになる。

ＮＰＯ法人福島学グローバルネットワークの理事長 黒澤文雄さんは、貴重な震災体験、防災・減災のを対外的にも県内的にも継承していくことが、福島県の重要な責務であるとして、今、特に県外からの修学旅行生の招聘に尽力している、と語っておられました。

東京電力が福島第一発電所の事故終息のための中継基地として使用しているサッカーのナショナルトレーニングセンター**Ｊヴィレッジ**は、オリンピックのため２年後には元のサッカー場に戻す計画が進められている。

4．地域瓦版

東京ボードビルショー「パパのデモクラシー」が 12 月 18 日（金）、19 日（土）、神戸文化ホールで開催されます。劇団を主宰する佐藤Ｂ作さんは、福島県しゃくなげ大使、南相馬市ふるさと親善大使です。今回の劇は泣けて笑える大人の喜劇です。

ゆうかりに乾杯の過去の放送音声と文書化した放送概要は、下記ＵＲＬで視聴いただけます。

http://yukari.hyogo.jp/